図書館員×地域おこし協力隊の可能性

宮崎県椎葉村での活動から考える

藤江 開生（椎葉村地域おこし協力隊　時おこす司書）

1　はじめに

地域おこしやまちづくり、地方創生という言葉が聞かれるようになって久しい。総務省は、都市部から地方・地域へという人の流れをつくり、スムーズな移住・定住につなげるための地域おこし協力隊制度に力を入れている。令和４年度時点では 6,447 名の隊員が活動していたが、これを令和８年度までに 10,000 人にまで増やす目標を掲げている[1)]。

かくいう筆者もこの地域おこし協力隊制度を利用し、大学卒業後まもない 2023（令和５）年４月から、宮崎県椎葉村で協力隊員として活動している。協力隊制度は各自治体によって柔軟に運用されており、業務内容は多岐にわたっている。筆者の場合は「時おこす司書」というミッション名のもと、椎葉村図書館「ぶん文 Bun」にて図書館司書として働いている。地域おこし協力隊の図書館員（募集形態上、司書扱いでない場合も含むため図書館員と表記する。筆者に関しては、司書であるため図書館司書と表記する。）は徐々に増えている印象を受けるが、まだまだ珍しい存在であると自己認識している。

本稿では、そうした筆者の経験・立場をもとに、椎葉村や椎葉村図書館「ぶん文 Bun」の概要に触れたうえで、①椎葉村にやってくるに至った経緯（広義での就職活動について）、②椎葉村での１年間の活動内容と今後の展望、③図書館員×地域おこし協力隊の可能性について述べる。よりよい図書館、よりよい図書館員の働き方を議論する材料になれば本望である。

2　椎葉村について

2.1 椎葉村の概要

九州のほぼ真ん中に位置する宮崎県椎葉村（しいばそん）は、東京 23 区より一回り小さい 537.29 ㎢の面積を誇り、その約 95％が森林という、急峻な山々に囲まれた土地である[2)]。推定樹齢 600～800 年の巨木がいくつも存在し、仙人の棚田と呼ばれる棚田があるなど、山に囲まれた自然環境ならではの観光資源がある。あまりに山深い環境ということもあり、平家落人の里としても有名で、平家方の鶴富姫と源氏方の那須大八郎宗久（那須与一の弟とされる）との恋物語・鶴富姫伝説が今に伝わっている。この伝説が歌われている民謡「ひえつき節」をはじめ、国の重要無形民俗文化財である椎葉神楽（26 か所）や的射、臼太鼓踊り、焼畑、狩猟など、民俗芸能、山の風習・文化が今なお盛んな土地である。1908（明治 41）年には民俗学者の柳田國男が一週間村内に滞在し、その時の調査をもとに『後狩詞記』を著した。これが日本民俗学最初の出版物であり、椎葉村は日本民俗発祥の地とされている[3)]。また、その豊富な民俗芸能文化を受け継ぎ、観光資源に活かすということで、1997（平成 9）年には椎葉民俗芸能博物館が開館し、今に至る。村の規模や、四半世紀以上前の開館であったという時代背景を鑑みると、資料内容、展示ともに当時としては非常に充実した博物館であったと言えよう。

戦後まもなく上椎葉ダム（1955（昭和30）年完成）の建設工事が始まり、工事関係者の流入などもあって、1万人超えの人口を誇る時代もあったが、現在の人口は2,282人（令和６（2024）年２月１日現在、推計）となっており、過疎化・少子高齢化が著しく進んでいる[4)]。

高齢化率は 47.8%（2023（令和 5）10 月 1 日現在）となっており、県内でもトップクラスの数値となっている[5)]。かつては村内 10 地区すべてに小学校があったが、現在では小学校 5 校（うち 1 校を除き複式学級体制）、中学校 1 校となっている。同じ椎葉村内でも移動に 1 時間前後かかる場合もあり、中学校の横には寮が併設され、多くの生徒が寮生活をしている。また、村には高校がないため、中学校卒業後は村外に出ていく生徒がほとんどである。

このように、古くから伝わる民俗文化などの魅力にあふれる一方で、椎葉村の置かれている状況は、全国的に進む地方の過疎化と比べても、決して楽観視できるようなものではない。そのため、村では地域おこし協力隊制度を積極的に活用し、移住者獲得・地域振興に奔走している。第 6 次椎葉村長期総合計画（前期 2022年度～2026年度）では、地域おこし協力隊を 5 年間で40人採用することを目標に掲げており、2023（令和 5）年度は、筆者を含め 11 人の協力隊がそれぞれのミッションを持ちながら活動している[6)]。移住のサポートなどを行う「移住コーディネーター」や、農業（ミニトマト栽培）の「秘境 de 農業」、e スポーツ担当の「ヒトを育てる e スポーツプレイヤー」など、多種多様なミッション及びミッション名となっている。ちなみに筆者は、自ら村の課題を見極め、やりたいことを提案する「ONLY ONE プランナー」枠で応募し、「時おこす司書」というミッション名のもと活動中である。

2.2 椎葉村図書館「ぶん文 Bun」について

椎葉村図書館「ぶん文 Bun」（以下、「ぶん文 Bun」）は、交流拠点施設 Katerie（以下、Katerie）の 2 階に入る形で、2020（令和 2）年 7 月に開館した。「ぶん文 Bun」に関しては、「図書館と地域をむすぶ協議会」の太田氏と地域おこし協力隊（当時）・クリエイティブ司書の小宮山が中心となって立ち上げた[7)]。立ち上げまでの経緯など詳細については、参考資料一覧より、小宮山の各種発信（note 記事など）を参照されたいが、ここでは 3 点に絞って「ぶん文 Bun」の特徴に言及したい[8)]。

写真：交流拠点施設 Katerie 外観

写真：椎葉村図書館「ぶん文 Bun」入口付近の様子

まず、1 点目として、地域振興課所管の施設である点を挙げたい。一般的に図書館は、教育委員会所管である場合が多いが、2019（平成 31）年 3 月に「地域の自主性及び自立性を高めるための改革の推進を図るための関係法律の整備に関する法律案」（第 9 次地方分権一括法案）が閣議決定され、自治体の判断によって教育委員会から首長部局への移管が可能となった[9)]。この法案の後押しもあり、「ぶん文

Bun」は村長が館長を務め、地域振興課所管となっている。この背景として、第6次椎葉村長期総合計画（前期 2022年度～2026年度）で掲げた基本理念「かえりたい『郷』で生きていく。」との方向性の一致が挙げられる。先述の通り、中学校卒業後にほとんどの子どもたちは村の外に出ることになる。そのため、帰ってきたいと思えるような視点からの村づくりが欠かせない。ゆえに、「ぶん文 Bun」はその課題解決に寄与する存在として位置づけられ、「UI ターンを生み出す図書館」を標榜している。その結果、開館から 3 年も経たぬうちにまんまとＩターンでやってきた移住者の一人が、何を隠そう筆者なのである。

次に、2 点目として、地域経済循環モデルの確立が挙げられる。経済循環モデルというと大仰だが、書店のない椎葉村において、椎葉村観光協会を書店に見立てることで、図書資料購入費や装備代（図書資料装備も観光協会職員が担う）が観光協会に支払われるモデルを確立している。開館から 3 年が経過した現在の「ぶん文 Bun」は、開館以来図書資料を充実させる時期にあたり、年間図書資料購入費が 600万円（2022（令和 4）年度実績）となっているため、決して少なくない貨幣流通を村内にもたらしている。選書から装備まで一括して手掛けている企業もあるが、そのサービスを享受した場合には、代償として域外へと貨幣が流れてしまう。その点を考慮すると、地域振興に寄与する図書館として取るべき選択はおのずと決まっていったものと考えられる。

最後に、3 点目として、居住地によらず、誰でも貸出カードの作成が可能な点を挙げたい。一般的な図書館では、図書館が位置する市区町村の居住者や通勤・通学者、また近隣市区町村在住者などに制限されることが多い。しかし、「ぶん文Bun」ではそうした制限は設けていない。たしかに、村民の税金で購入された本であるため、村民にサービスとして還元されるのは至極真っ当な考え方である。「ぶん文Bun」は村民への当然のサービスに加え、村外利用者へのサービスも同様に行うことで、外部評価の獲得につながることを意識している。外部評価の高まりは、UI ターンのターゲット層に響き、潜在的な移住希望者の増加とその顕在化に寄与しうるのである。村外のどこから来るにも、車でおよそ数十分～1 時間は最低でもかかる椎葉村だからこそなせる業とも言えるだろう。

3　椎葉村にやってくるまでの経緯

ここまで椎葉村の概要、そして椎葉村図書館「ぶん文 Bun」について簡単に紹介してきた。では、筆者はいったいどのようにしてこの村と出会い、この図書館と出会ったのかについて、ここでは述べていくこととする。

3.1 原体験と図書館実習

筆者は元来、転勤族の家庭で育ったという背景もあり、都市と地方の格差（とりわけ文化資本に関する格差）に対する問題意識を持っていた。原体験として、大阪府豊中市の学校図書館と北海道留萌（るもい）市の学校図書館における格差を、子どもながらに目の当たりにしたことが挙げられる。その体験だけが影響したのではないが、都会と地方の双方を経験して以来、地方への関心を強く持ち、また、図書館や本についても学びたいと考えながら大学入学を果たした。その思いのもと、学内外さまざまな活動に精を出していたが、2021（令和3）年11月には、以前からかかわりがあり、立教大学ともつながりのあった岩手県陸前高田市の陸前高田市立図書館で図書館実習を行った。その時の図書館実習体験記については、『St. Paul's Librarian』の36号に収録されているので、ぜひ参照されたい[10)]。この時陸前高田を選んだのも、地方の公共図書館が果たせる役割やまちづくりとの関係性に関心があったから

である。

3.2 就職活動、のようなもの

今考えると、先述の選択がいろんな意味で椎葉村にやってくることにつながっている。図書館実習で得られた経験、陸前高田というまちで1週間以上過ごした経験による図書館司書への関心の高まり、地方で働くことの解像度上昇は言うまでもないのだが、現実問題として、11月末に長期インターンのエントリー〆切が集中しており、図書館実習に注力していた筆者はそれらの準備を後回しにしたため、結局どれにも申し込みすることなく徒に季節だけが移っていったのであった。そこまで本気で考えていなかった（考えられなかった）ことが最大の要因であるが、新型コロナウイルスの影響で実習時期が8月から11月にずれたことを思い起こすと、当初予定通りの実習であったならば、また違った進路選択になっていたかもしれない。

その後、出遅れを取り戻すといった発想には至らず、短中長期インターンいずれにも申し込むことなく、それまでと変わりのない学生生活を送っていた。ただし、インターンとは何かといった知識や自己分析の実施については、大学1年時から学内の説明会や講座、学外でのワークショップなどに参加することで経験していたため、就活における準備が全くのゼロだったというわけではない。

この時点では、図書館司書への関心は高まっていたものの、司書になる気などさらさらなかった。先述の原体験こそあれども、そこへのアプローチが司書しかないというわけでもないと考えていたためである。また、思い入れもそこまで強くなかった。周囲を見渡せば、子どものころから司書に憧れていたという友人もおり、そうした存在を差し置いて自分が司書になるなど到底考えられることではなかったのである。さらに、公務員になることに対しては司書になること以上に関心がなく、いやむしろ抵抗があったため（今の立場で何を言うのかと、ほとほと呆れられるかもしれないがご容赦いただきたい）、まずは公務員になって、いつやってくるかもわからない図書館勤務を目指すルートを取ることは、選択肢として一切考えていなかった。司書採用の狭き門を叩くほどの魅力も感じていなかった。ましてや非常勤で勤め始めるなど、言語道断である。かたや指定管理を数多く手がけている民間企業や図書館関連企業への就職という路線にも、興味を持てなかったのである。

このような考えを持っていた筆者だが、2022（令和4）年2月～3月ごろには、①東京から離れること、②地方で数年間経験を積み、最低限のお金は稼ぐこと、③その数年間でその後の展開を考えつつ、その後に好影響を及ぼすことという方針を打ち立てていた。当時、「その後」に進みたい道を抱いていたため、そこからの逆算もかねてこのような方針を打ち立てたのであった。この方針に従い、地方で経験を積むべく職探しに限らずさまざまな情報を探していたなかで、東京でも仕事をしつつ、地方で活動されている方とつながり、オンラインでお話をさせていただく機会を得た。当初は、その人を含む地方で活動する方々が立ち上げた、全国各地のゲストハウスを転々としながら学ぶコミュニティに入ることも検討したが、如何せん食い扶持を稼ぐことが叶わないと感じたため断念した。しかし、その方と話すなかで地域おこし協力隊を勧められ、にわかに協力隊が現実味のある存在として、眼前に立ち現れたのである。そこから、一般社団法人 移住・交流推進機構（JOIN）に掲載されている協力隊募集情報にあたるなどして、情報収集に取り組み始めた[11)]。

リサーチを進めていくと、以前耳にしたことのある協力隊運用の「ピンキリ」状態がそれとなく募集ページから透けて見えるようになった。明らかに「地雷」と言ってしまってよい

ような募集もあれば、逆に新卒ではあまりに厳しい実績・経験を求めているものまでさまざまであった。当然「地雷」は避けたいわけだが、自分の立場を顧みると即戦力とは呼べないただの新卒である。雇用主からすれば、使い勝手のよい、人数補填に最適な若者と思われてしまう可能性が高い。それは避けたいと考えた時に、なけなしの自分の専門性として思い出されたのが図書館司書という資格であった。

試しに図書館司書の協力隊募集を検索したところ、惹かれる募集情報を挙げていたのが、北海道奈井江町と宮崎県椎葉村だった。この両者を見つけたのは３月末から４月だったろうか。前者は、地元札幌からのアクセスも比較的良好であり、自由度が高いように思われたが、図書館現場での経験なくしていきなり手掛ける仕事としては、やや難易度が高いように思われた。また、実際に担当者に問い合わせたところ、募集期限の〆切が大学在学中であり、期限までに誰も応募が来なければ、募集を延長し、応募していただくのも可能というような反応であった。一方の後者は、「飛び出す司書」というかなり自分が考える理想的な司書像に近いコンセプトを持つなんとも魅力的な募集をしており、もうその時点で心はグッと掴まれていた。また、調べてみると、つい最近できたばかりの図書館（2020（令和２）年７月開館）で、村の厳しい自然環境からは想像し得ない、全国の名だたる図書館にも引けを取らない存在感を放っているように思えた。即刻申し込もうとしたが、すでに募集は終了しているとの情報を見つけ、忸怩たる思いになったことを今でも覚えている。しかし、各種情報掲載媒体を漁っていると、募集期間を延長しているとの文字を見つけ、即座に担当者（小宮山）にTwitter（現 X）で DM を送ったのである。のちに聞いたところによれば、コロナの影響で募集期間を延ばしていたらしい。これが募集〆切の前日のことであった。

DM を通して、自分が大学４年生で休学をするつもりはなく、働き始められるのが翌年４月からである旨を伝えたところ、「飛び出す司書」の着任時期とは合わないけれども、せっかく興味を持ってもらったのだから一度話しましょうということで、6 月上旬に Zoom にて面談を行った。その場で、「飛び出す司書」ではない司書として何ができるかを探るためにも、まずは試しに現地に来ることを勧められ、地域おこし協力隊インターンの制度を活用し、椎葉村を実際に訪問する方針を固めたのである。

地域おこし協力隊インターンは、2週間～3カ月の期間で、地域おこし協力隊と同様に地域での活動を行うというものである。協力隊としての活動の具体的なイメージが湧きにくいといった声から、2021（令和３）年度に創設された制度である。各自治体に対して、協力隊インターン参加者の活動に要する経費として、１人１日あたり 1.2 万円を上限に財政措置が取られている[12)]。

面談時の話し合いを受けて、９月に２週間程度訪問することにし、卒論に意識を持って行かれながらも、準備を進めていった。椎葉村の地域おこし協力隊に着任するのには、運転免許の所持が必須であり、それまで全く必要性を感じていなかった運転免許の取得のため、慌てて教習所に通い始めたのが７月であった（結局、12月中旬の卒論提出後に本格的に通うようになるのだが）。８月は、陸前高田市での学外活動の準備・実施に精を出し、おまけにコロナにも感染してしまい、あっという間に過ぎ去ってしまった。気がつけば椎葉村へ向かう日を迎えていたのである。

インターンでは、現役協力隊や協力隊OB・OGと話す時間、村内での各種体験、図書館での業務体験などを一通り行い、村が抱える課題や自分ができることを洗い出しながら整理していき、現在の「時おこす司書」のミッション・業務内容のベースとなるようなものを考案した。この成果について、インターン最終日に発表予定であったが、村内外に甚大な被害を

もたらすことになった台風 14 号が接近していたため、やむなくインターンを早めに切り上げ、村外に避難した。その後、特に椎葉村を上回る環境を見つけられなかったこともあり、順当に「ONLY ONE プランナー」としての応募を行い、11 月末にインターン成果発表プレゼン兼採用面接試験がオンライン上で開かれた。その結果、合格をいただき、晴れて椎葉村地域おこし協力隊として 4 月から働き始める権利を得たのであった。

4　椎葉村での 1 年間の活動内容と今後の展望

前章で述べたような経緯があって、2023（令和 5）年 4 月から協力隊として働き始めた。「時おこす司書」というミッション名は、着任後上司を交えての話し合いのもと決定したものである。また、インターン時に提案したものを部分的に軌道修正する形で業務内容についても方向性を固めていった。

筆者の場合図書館司書ではあるものの、地域おこし協力隊であるということで、自らのミッション遂行を第一に考えて行動できることになっている。したがって、「時おこす司書」としては、将来的なデジタルアーカイブ構築を主導することを念頭に、村民のライフストーリー/ヒストリーの収集、昔の写真の収集、（それらの発信場所としての位置づけも意識して）ポッドキャストラジオ配信（「時おこす司書の気まぐれラジオ」という番組名で、Spotify で配信中）を主たる業務として行っている。これらは、図書館内にとどまっているだけでは到底満足な結果を得られないものばかりである。ゆえに、村内各地に村民インタビューに出かけることや、博物館と連携し、昔の資料について知識を深めつつ、その資料自体の把握に努めることなど、比較的流動的な動きが許されている。春先から夏ごろにかけては顔を売る意味合いも込めて、「飛び出す司書」とともに、村内各地で連日開かれているサロン（社協開催）での移動図書貸出の手伝いをした。その後、一時移動図書休止期間を経て、筆者が本格的に村民へのインタビューを軌道に乗せ始めたのは 11 月以降になってからである。また、ラジオ配信は、6 月ごろから試験的に配信を開始した。一人語りでの配信を基本としつつも、身近な方（現役協力隊など）をゲストに呼ぶ方針にし、平均して月 2 回以上は配信している。ラジオについては、今後さらに力を入れていきたいと考えており、いずれはコミュニティラジオのような存在にまで昇華したいところである。そのほか、副次的な活動として、大学時代から続けている落語の披露なども行っている。また、夏休み期間中には村内中学生全員分の読書感想文（コピー）を読み、コメントのフィードバックを返すという取り組みも行った。村内に司書教諭・学校司書がいない環境下のため、公共図書館としても手厚いサポートを試みている。その他、イベント等企画案についてはラフな状態でも積極的に提案することを心がけており、次年度以降形になるものが複数ある。

このようなメインミッション内容は、一見司書と名乗るにはあまりに幅の広いジャンルに首を突っ込んでいるようにも見えるだろうが、それでよいと考えている。司書が司書らしくないことに注力することは、既存の司書イメージに縛られることなく司書の可能性を広げうる実験として、必要なことであると捉えている。一方で、当然当たり前の図書館業務についても担当する。カウンター業務と言える図書資料の貸出・返却・返却本の排架、選書作業、新規購入本の排架、特集棚の展示、蔵書点検、レファレンスなど、こなした回数が非常に少ないものもあるが、どれも経験はさせてもらっている。利用者の絶対数が少ない、村の図書館だからこそ可能なことと言えるかもしれない。

今後は、1 年目に行ってきたものをさらに磨くと同時に、新しい取り組みにも挑む。なかでも、目玉としては椎葉村としてのデジタルアーカイブ構築が挙げられる。立派なデジタル

アーカイブを目指すのではなく、村民にとって意味のあるものを構築すべく、目下情報収集とスキルの修得にいそしんでいるところである。数年間の長期的な取り組みになろう。どこに重きを置くのか、どこまでやるのか等、考えるべき点は山積みであるが、一つ一つクリアし、丁寧に進めていきたい。しかし、貴重な情報源をお持ちの方々のなかには後期高齢者も多いため、現在収集可能な情報については迅速に取り組んで収集していきたい。

5　図書館員×地域おこし協力隊の可能性

ここまで、筆者が椎葉村地域おこし協力隊になるまでの経緯や実際の仕事内容についてみてきた。ここでは、図書館員×地域おこし協力隊という雇用の在り方・働き方について、筆者の考えをまとめることで、その可能性を探りたいと考える。なお、筆者が公共図書館員であるため、他の館種も検討されるべきだが、ここでは公共図書館を中心に考える。

はじめに、雇用の在り方に関して言及する。官製ワーキングプアややりがい搾取といった、ありがたくない言葉とともに語られることの多い図書館員の待遇や雇用問題であるが、協力隊制度と掛け合わせることで一定程度の改善が見込めると考えている。筆者の場合、2020（令和２）年の地方公務員法改正により導入された会計年度任用職員の扱いであるが、協力隊に関しては副業が許されているため、副業を行っている[13)]。また、協力隊１人当たり480万円を上限とした財政措置が取られており、自治体による差はあれども、家賃補助が行われる場合がほとんどのため、単なる会計年度任用職員よりも経済的な余裕を生み出せる体制にあると言える。さらに、協力隊は１年ごとの契約にはなるものの、最大３年間の活動が可能であるため、多くの場合は３年間活動する前提で募集がかけられている。この３年を短いと見る向きもあるだろうが、３年間の雇用が保証されているというのは、贅沢なことのようにも感じられる。また、協力隊制度自体が移住定住促進を目指した制度であるため、その制度を利用して図書館員の募集をかけている時点で、希望すれば３年間の任期終了後も継続して自治体に雇用される可能性が高い（もしそのような想定が自治体側にないのならば、それは改善されるべき問題である）。この点に関しては、あくまで隊員が決めることであるが、たとえ引き続き図書館員として働く選択を取らないにしても、３年間で次の展開を考えざるを得ない環境に身を置くというのは、一定程度の緊張感を持つことができ、また、自らの適性を見極めるうえでも役立つと考える。筆者のように司書資格を持ちながらも実務経験がない人が司書としてのキャリアをスタートさせる第一歩としても、ハードルが低いと考えられる。

一方で、自治体側は協力隊制度に丸投げした状態で甘えていてはいけないだろう。また、人数補填のための図書館員募集ではなく、比較的動きやすい協力隊ならではの役割を持たせるなど、特色を持った形で募集をかけるのがよいと考える。そのうえで、協力隊卒業後の在り方として、自治体職員となり、図書館員として働き続けるのが王道の在り方だと言えるだろうが、それに限らない在り方の模索が求められる。拙いながらも、筆者の案を挙げておく。協力隊は卒業後に地域での自立が求められるため、起業支援についても充実したものが用意されている自治体が多い。その支援を活用し、地域商社やNPOのような組織を立ち上げ、協力隊時代に発見した地域のニーズに即した事業に取り組むのである。それと同時に、自治体として図書館運営に指定管理者制度を導入し、立ち上げた組織で指定管理者に名乗り出るのである。当然、全国的に指定管理館を多く持つ企業などが参戦してくる可能性もあるが、当該地域のことをどの組織よりも深く理解し、実際の運営ノウハウも有する地域の組織が優位に立てると考える。体力のない自治体としては、協力隊制度で人材獲得かつ人材育成を図りながら、3 年で途切れることのない専門性の醸成や継承といった図書館の質を担保する好

循環を生み出すことができると考える。図書館員としての人材育成にとどまらず、地域での活躍が期待される人材も育成することにつながるだろう。そのような環境は、働き手にとっても理想的な環境となりうるのではないだろうか。

雇用の在り方に続いて、図書館員としての視野の広がりを挙げたい。地域おこし協力隊は、その名の通り地域での活動が求められる存在である。そのため、従事する仕事内容が何であれ、地域で暮らしていくなかで、地域行事への参加や地域住民とのかかわりは日常的なことである。また、協力隊は、自治体の規模にもよるが、時折自分は政治家だったのかと錯覚するほどには自己紹介や挨拶をする機会も多く、顔が知られている存在である。この、半ば強制的に地域へ飛び込める仕組みは、図書館員自身が地域へ出る契機となり、既存の利用者のさらなるニーズの把捉だけでなく、潜在的利用者の獲得とそのニーズを把握することに大いに役立つと言える。また、図書館員と地域住民の距離が近くなることで、図書館が心理的に遠かった人にも足を運んでもらい、活用してもらうきっかけになる可能性を秘めている。まちづくりの核として図書館が位置づけられることが増えたり、地域資料の活用に焦点が当てられたりなど、地域とのかかわりが近年の図書館におけるキーコンセプトのように感じている。そのコンセプトの一環として、図書館員も地域に出ていくことが喧伝され、実際にそのような動きも加速しているように思われる。しかし、いまだ理念にとどまり、具体的な行動に移せていない図書館や、意識の上で地域へ出ることへの抵抗感を抱いている図書館員が多いことも容易に想像できる。そこで、地域おこし協力隊制度をうまく融合させることで、その理念達成への第一歩を踏み出してほしいと考える。すでに地域の情報が集まってくる図書館であれ、今はまだそうでもない図書館であれ、より広範囲で、より深い情報が集う状況を生み出す一助に地域おこし協力隊図書館員がなりうる。一例としては、文字や文書資料としては残っていない地域住民の間で共有されている暗黙知の収集などが挙げられる。

以上２点から考えるに、図書館員×地域おこし協力隊という在り方は、積極的に制度運用することで、地域にとってより良い図書館になるばかりでなく、そこで働く図書館員にとっても充実した環境を提供できる可能性がある。課題も多いとは思うが、残念ながら図書館員の正当な専門性を訴えるだけではほとんど何も変わらないことは火を見るよりも明らかである。そのため、今できうる限りのことをしたたかに試行錯誤することが重要だと考える。筆者は、その一つの可能性を地域おこし協力隊に見出している。

６　おわりに

本稿では、椎葉村で地域おこし協力隊図書館司書として働く筆者の経験を、そこに至るまでも含めて可能な限りつぶさに述べた。もう少し学術的に価値のある研究論文寄りに仕立てたかったが、またの機会に譲ることとしたい。本稿のテーマ設定は一任されていたため、決めるまでに相当時間を要したが、今後も状況が変わり、また各地の事例やデータもたまっていくであろう、図書館員×地域おこし協力隊というテーマに落ち着かせられたのは結果としてよかったと感じている。本文中、筆者の原体験について触れたが、その根底にあるのは怒りである。雇用問題に関しても、幼少期からの憧れで司書を目指し、結果として食えない環境に身を置く人が生みだされ続けているこの構造に怒りを覚えている。筆者は、右も左もわからないような、風が吹けば飛ばされてしまうような、司書と名乗ることすらおこがましいような生意気な若造であるが、それでも自らの怒りと向き合い、今後も今しばらくは地域おこし協力隊図書館司書として、九州の秘境の村から行動を起こし続けたい。

[1] 総務省「地域おこし協力隊とは」，総務省トップ＞政策＞地方行財政＞地域力の創造・地方の再生＞ 地域おこし協力隊，https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/02gyosei08_03000066.html#:~:text=%E5%85%B7%E4%BD%93%E7%9A%84%E3%81%AA%E6%B4%BB%E5%8B%95%E5%86%85%E5%AE%B9，%E5%8F%97%E3%81%91%E3%82%8B%E3%81%93%E3%81%A8%E3%81%8C%E3%81%A7%E3%81%8D%E3%81%BE%E3%81%99%E3%80%82，（参照 2024-02-29）.

[2] 椎葉村「椎葉村勢要覧資料編 2023」，https://www.vill.shiiba.miyazaki.jp/promote/pdf/2023%E5%B9%B4%E6%9D%91%E5%8B%A2%E8%A6%81%E8%A6%A7.pdf，（参照 2024-02-29）.

[3] 椎葉村観光協会「柳田國男（やなぎたくにお）」，ホーム＞椎葉村を知るエピソード ＞柳田國男（やなぎたくにお），2018.3.23，https://www.shiibakanko.jp/history/history5，（参照 2024-02-29）.

[4] 椎葉村ホームページ「椎葉村の人口」，https://www.vill.shiiba.miyazaki.jp/，（参照 2024-02-29）.

[5] 宮崎県「宮崎における高齢化の状況」，トップ＞くらし・健康・福祉＞高齢者・介護＞高齢化対策＞ 宮崎県における高齢化の状況，2024.1.5，https://www.pref.miyazaki.lg.jp/documents/49853/49853_20240105092321-1.pdf，（参照 2024-02-29）.

[6] 椎葉村「第 6 次椎葉村長期総合計画」，https://www.vill.shiiba.miyazaki.jp/promote/post_7.php，（参照 2024-02-29）.

[7] 図書館と地域をむすぶ協議会 http://www.toshokan.club/，（参照 2024-02-29）.

[8] 小宮山剛「「かえりたい図書館」をつくる、深める、広める：椎葉村図書館「ぶん文 Bun」のソーシャルイノベーション」https://note.com/tsuyoshikomiyama/n/n913001872656，（参照 2024-02-29）．などを参照されたい。

[9] 内閣府「地域の自主性及び自立性を高めるための改革の推進を図るための関係法律 内閣府地方分権改革推進室の整備に関する法律案（第９次地方分権一括法案）の概要」https://www.cao.go.jp/bunken-suishin/doc/09ikkatsu-gaiyou_kakugi.pdf，（参照 2024-02-29）.

[10] 藤江開生「図書館実習体験記 陸前高田市立図書館での実習を終えて」『St. Paul’s Librarian』no. 36，2022.3.31，file:///C:/Users/%E4%BA%A4%E6%B5%81%E6%8B%A0%E7%82%B9%E6%96%BD%E8%A8%ADKaterie/Downloads/AA11356662_36_11.pdf，（参照 2024-02-29）.

[11] 一般社団法人 移住・交流推進機構（JOIN），https://www.iju-join.jp/index.html，（参照 2024-02-29）.

[12] 総務省「地域おこし協力隊インターン」，https://www.soumu.go.jp/main_content/000745990.pdf，（参照 2024-02-29）.

[13] 総務省「会計年度任用職員制度について」，https://www.soumu.go.jp/main_content/000638276.pdf，（参照 2024-02-29）.